

# 猫伝染性腹膜炎

## — 猫の致死性コロナウイルス感染症 —



2026年 8月 7日 (金)  
15:00~16:30



日本生物科学研究所 管理棟  
会議室2・3 (オンライン併用)



高野 友美 先生

北里大学  
獣医学部 獣医学科  
獣医伝染病学研究室



### 要 旨

猫コロナウイルス (FCoV) は猫に広く浸潤しているウイルスである。多くの場合、FCoVは不顕性の腸管感染にとどまる。しかし一部の猫では、腸管のFCoVが猫体内で変化し、単球・マクロファージへの感染性を獲得する。その結果、感染細胞を介してウイルスが全身へ広がり、致死性の炎症性疾患である猫伝染性腹膜炎 (FIP) を引き起こすと考えられている。従来、腸管にとどまるFCoVは猫腸コロナウイルス (FECV)、FIPを引き起こすFCoVはFIPウイルス (FIPV) と呼ばれてきた。現在、両者は、独立した病原体ではなく、ウイルス側の変化 (遺伝子変異・組換え) と宿主の免疫応答の違いによって異なる病態を示す2つの生物型として理解されている。

本講演ではまず、FIPという疾患と、その病原体であるFCoVについて、両者の本質を明らかにしようとしてきた研究の歴史をたどる。次に、FIP発症に関わる宿主の免疫応答について解説する。そして、これらの基盤的理解を踏まえて、近年の研究展開を概観する。

全ゲノム解析の普及により、FCoVの多様性と病原性関連領域の解析は大きく進んだ。FCoV-23に代表される組換え猫コロナウイルスの発見は、その重要な成果の一つである。FCoV-23の発見は、FECVが感染猫の体内で病原性を獲得するという1990年代中頃以降の理解に対し、高病原性FCoV (FIPV) の猫間伝播という古くからの論点を改めて浮かび上がらせた。さらに2020年前後における抗ウイルス化合物・製剤 (GS-441524やモルヌピラビルなど) の登場によって、FIPは不治の病から寛解できる疾患へと大きく変わりつつある。一方で、新たな課題、すなわち、診断の標準化・治療反応や終了時期の判断・再発の早期把握・寛解後の長期管理・薬剤耐性などが浮き彫りになっている。

最後に、FIPワクチン開発の現状と課題を取り上げる。FIP予防には二つの方向性がある。一つは腸管FCoV感染や糞便中へのウイルス排出を抑えるワクチンである。もう一つはFIP発症そのものを防ぐワクチンである。後者については、組換えN蛋白質や組換えFIPV遺伝子欠失変異体を用いた実験で高い防御効果が報告されている。今後の課題は、これらのワクチン候補が、既感染歴や免疫状態の異なる猫集団でも同様の発症防御を示すかどうかにある。